

# 日本語学習者のアスペクト形式の 習得に関する一考察

塩川絵里子\*

---

## 目次

---

- 1 先行研究－「テイル」の習得
  - 2 調査の方法
    - 2.1 調査の対象
    - 2.2 データの採取方法
    - 2.3 研究課題
  - 3 結果
    - 3.1 調査①
    - 3.2 調査②
  - 4 考察
    - 4.1 母語の影響
    - 4.2 普遍的カテゴリー
    - 4.3 インプットの影響
  - 5 今後の課題
- 

## 1 先行研究－「テイル」の習得

日本語のアスペクト形式「テイル」には「動作の継続」と「結果の状態」を表す中心的な2用法がある。両者は持続性のある活動動詞と、限界性のある到達／達成動詞と「テイル」が結びついた場合に表される用法であり、現在までにそれらの2用法の習得順序について多くの調査が行われてきた。

---

\* 九州大学大学院 比較社会文化学府 日本社会文化専攻 博士課程

その結果、ほぼ全ての研究において「テイル」が活動動詞<sup>1)</sup>と結びついて「動作の継続」を表す用法は到達／達成動詞と結びついて「結果の状態」を表す用法よりも習得が容易であるとされてきた。(黒野1995, 許1997, 許2000, 小山1998, 2003, 空ける菅谷2003, 菅谷2004, Shirai & Kurono1998)それらの現象に関しては、限界性のある到達／達成動詞では限界性がなく持続性がある活動動詞よりも「テイル」との結びつきが弱く「タ」との結びつきが強いというアスペクト仮説(Shirai&Andersen1995)に基づく説明(小山1998, 2003, Shirai & Kurono 1998)や、プロトタイプ理論(Rosch1973)による説明(許2000)などが用いられている。しかし、これらの研究はあくまでも「動作の継続」, 「結果の状態」という異なる用法間の習得順序の比較, また活動動詞, 到達／達成動詞という異なる動詞分類間での形態素との結びつきの比較であり, 同じ用法における習得順序の比較や, 同一動詞分類内での動詞と形態素との結びつきの比較については理論的な研究はまだあまり行われていない。

菅谷(2005)では, 「結果の状態」の用法の習得に関して, 学習者が動詞+「テイル」をかたまりとして覚えている現象を指摘し, 「結果の状態」の用法の習得は動詞ごとに進むという仮説を提示しているが, あくまで現象レベルでの説明にとどまっており, それらの動詞ごとに進む習得の理論的な説明原理に関しては明らかにしていない。そこで本稿では到達／達成動詞と「テイル」が結びついて「結果の状態」を表す場合に同一の用法, 動詞に分類されるものの中でも, より「テイル」と結びつきやすいもの, 「タ」と結びつきにくいものがあるという現象の指摘を行い, それらの現象に影響を与える要因についての可能性を指摘する。

## 2 調査の方法

今回の調査は調査①文法性判断テストと調査②フォローアップインタビューの2つである。

### 2.1 調査の対象

調査①：九州大学留学生センターで日本語クラスを受講する中・韓国語母語話者各21名計42名に調査への協力を依頼した。また, 統制群として日本語母語話者63

1) 動詞分類はVendler(1967)に基づく。また, 訳語は影山(1996)を用いた。

名にも協力を依頼し、学習者との比較に用いた。

調査②：調査対象者中の中・韓国語母語話者2名ずつ<sup>2)</sup>計4名にインタビューを行った。

## 2.2 データの採取方法

調査① 4 択の文法性判断テストを用いた。今回の発表は別の文法項目の習得の分析を目的として行われたある調査のうち的一部分を分析対象としたものである。全30問で、そのうち今回の分析の対象としたものは到達／達成動詞の4問である。実際に回答する際には回答者にとって自然だと思われるもの(◎), 不自然ではないが、使用しないもの(○), 少し不自然なもの(△), 完全に不自然なもの(×)の4段階を設け、回答してもらった。そのうち、◎のみを数え1点として集計した。

調査を実施する際、日本語学習者に対しては事前にアポイントメントを取り、指定した時間に指定した場所で調査に協力してもらった。一回に複数の学習者に調査に協力してもらったり、一人ずつ順番に協力してもらったりした。学習者には回答する際に、回答の仕方について例を示しながら簡単な説明を日本語で与えた。また、回答を開始してから学習者から語彙などについて質問が出た場合には、調査の結果に影響を与えない場合<sup>3)</sup>は意味を教えた。

母語話者については大人数の英語のクラスで10分程度時間を使い、一斉に回答してもらった。学習者の場合と違い、母語話者には主に冒頭の説明文を読んでもらい、特別な説明は与えなかった。回答はその場で54名分を回収し、残りの9名分は一週間後の授業時に回収した。

調査②調査①の4択問題終了後から3～4週間後に1人あたり30分程度インタビューを行った。事前に受けてもらった4択問題を調査者(筆者)が学習者と一緒に見直し、なぜこの回答をしたかを聞いていった。インタビューをした語彙については回答者・調査者の物理的・精神的問題からなるべく時間を短縮するために全30問のうち今回分析対象とした4問を含む16問についてのみ回答をしてもらった。

---

2) 韓国語母語話者のうち1人に関しては被験者の都合により、やむを得ず同伴者の2人とともに3人一緒に調査を行った。その際、問題の解答に対して3人それぞれに意見を言ってもらうという形式をとった。しかし分析の対象としたのはそのうちの1人の発話のみである。

3) 本調査の目的は動詞とマーカーの結びつきを調査することであったので、問題文の動詞に関しては調査への影響を考慮して意味を説明することはしなかった。その他の名詞等回答に該当しない部分の語彙については意味を聞かれた場合には説明を与えた。

## 2.3 研究課題

今回行った 2 つの調査で以下のような分析の観点を設定した。

調査①：4 つの動詞のうち、「テイル」と「タ」の選択傾向には動詞によって違いが見られるか。またその際、学習者の母語によって違いが見られるか。

調査②：学習者は動詞をどのように認知しているのか。

## 3 結果

### 3.1 調査①

調査対象とした動詞は全て「テイル」と結びついて結果の状態を表すものであるが、菅谷(2005)の仮説の推測するとおり、学習者のマーカーの選択傾向は動詞によって異なっていた。(表1, 2参照)許(1997), 小山(1998)で指摘されているように4), 全体的に中国語母語話者は韓国語母語話者よりも動詞と「タ」との結びつきが強く、「テイル」との結びつきが弱いようである。中国語・韓国語母語話者ともに「壊れる」で最も「タ」の選択率が高く、「テイル」の選択率が低かった。また、中国語・韓国語母語話者ともに「着る」で「テイル」の選択率が高く、「タ」の選択率が低くなっていた。(表1, 2参照)

表1 「タ」の選択率<sup>5)</sup> ※%(実数) 学習者各21名計42名, 母語話者63名

	壊れる	落ちる	入る	着る
中国語	61.9(13)	52.4(11)	57.1(12)	9.5(2)
韓国語	66.7(14)	38.1(8)	38.1(6)	14.3(3)
母語話者	38.1(24)	12.7(8)	3.2(2)	6.3(4)

4) 許(1997), 小山(1998)では、中国語母語話者の場合、「結果の状態」を表す場合、「テイル」のかわりに誤って「タ」を用いることが多いとしている。その理由として、中国語では「結果の状態」を表す場合に「了」を用いるため、母語の影響によるものだと説明している。

5) 選択率の算出方法は以下のとおり。表3-1では「タ」の選択率が「壊れる」の場合61.9ポイントとなっているが、「壊れる+テイル」を正答とする問題で、被験者の中国語母語話者がつけた◎のみを1点として集計したところ、13点になった。これを被験者数(中国語母語話者の場合は21名)で割った値の $13 \div 21 = 0.619$ が選択率である。

表2 「テイル」の選択率

	壊れる	落ちる	入る	着る
中国語	33.3(7)	33.3(7)	52.4(11)	95.2(20)
韓国語	47.6(10)	66.7(14)	76.2(16)	71.4(15)
母語話者	85.7(54)	82.5(52)	98.4(62)	88.9(56)

### 3.2 調査②

フォローアップインタビューにおける学習者の発話を分析すると、以下のようなものが得られた。以下、学習者のキーワードを太字で記す。6)※ ( ) 内は学習者の選択を示す。

「落ちる」：(落ちました)んーあーこの鍵は**もう落ちました**。(中国語)

「壊れる」：(壊れた) んー**その結果**，表すとき (中国語)

**この前**に壊れているから (韓国語)

「入る」：(入った) **過去・過去** (中国語)

「着る」：(着ている) **今，着ている**。(中国語)

学習者の発話を分析した結果、「落ちる」や「壊れる」「入る」では「過去(この前に)」「完了(もう~しました)」「結果」，「着る」に関しては「現在(今)」というキーワードが得られた。学習者は過去に完了した動作の結果を「タ」形で表し、「テイル」の場合は、現在の状態を表すものと結び付けているようである。これは、許(2000)の指摘する「テイル」のプロトタイプ性の1つが「+現在性」であるという主張とも一致し、また、Shirai & Andersen(1995)の、過去形を規定する意味素性の中に[+結果性]が含まれているという主張とも一致する。

学習者は動詞ごとに過去を表す「タ」と、現在を表す「テイル」とを異なって認知し、結び付けているようである。つまり同じ結果の状態を表すものの中でも動詞によって過去の「タ」と結び付けられるものと、現在性のある「テイル」と結びつけられるものがあるということがわかる。

6) 学習者の発話の中には、特に説明ができないということで、明確な回答が得られない場合も多かった。ここでは、明確な回答が得られたもののみを提示している。

## 4 考察

調査①の結果，従来「動作の継続」の用法に比べて習得が難しいとされてきた「結果の状態」の用法の中でも，動詞によって結びつく形態素に結びつきの強弱が見られることがわかった。では，なぜ同じ用法中でも動詞によって形態素との結びつきに強弱が見られるのだろうか。以下，3つの要因による説明を行い，その可能性を指摘したいと思う。

### 4.1 母語の影響

まず1つの説明として，母語の影響が考えられる。もし学習者の母語で日本語の動詞+「テイル」に対応するもので，動詞ごとに用いる形態素が異なるならば，今回の結果はそれを反映したものであるかもしれない。

今回対象にした4つの動詞で問題文と対応する文脈の場合，韓国語・中国語それぞれでは，動詞と形態素との結びつきは以下の表3ようになる。

表3 韓国語・中国語での動詞とマーカー

	壊れる	落ちる	入る	着る
韓国語	a/ətta	əitta	əitta	əitta
中国語	了	了/着	着	着

韓国語のa/əttaは完了を表し，əittaは状態を表す。また，中国語の「了」は既起こった変化を表し，「着」は現在の状態を表す。「壊れる」に関しては中国語と韓国語は同様の区別があり，他の3つの動詞に関しても完全には一致しないものの，動詞ごとに異なる形態素が用いられるようである。

今回の結果を見ると，韓国語で完了を表すa/əttaと結びつく動詞「壊れる」は「落ちる」「入る」「着る」に比べて「タ」との結びつきが強く「テイル」との結びつきが弱くなっていた。また，中国語で「了」と結びつく動詞「壊れる」「落ちる」は他の2つよりも比較的「タ」との結びつきが強く「テイル」との結びつきが弱くなっていた。従って，今回の調査で明らかになった動詞と形態素の結びつきは，学習者の母語での形態素の区別をそのまま反映した結果とも解釈でき，「結果の状態」の形態素「テイル」の習得に学習者の母語が影響を与えている可能性も充分考えられる。

先行研究においても，許(1997)，徐(2005)では，中国語母語話者の「結果の状

態」の「テイル」の習得について中国語には日本語の「結果の状態」の用法を表現する際にその場の状態・様子を表す「着」と既に起こった変化を表す「了」の2種類の形式があり、その母語での形式の違いが学習者の「テイル」の習得に影響を与えているとしている。また、韓(2005)では、文法性判断テストを用いた調査の結果、「結果の状態」での正答率に差が見られたことについて、韓国語では日本語の結果の状態にあたる文脈でも、動詞によって完了のa/Əttaを用いる場合と状態を表すəittaを用いる場合の違いがあり、それが学習者の正答率に影響を与えたと説明している。

さらに、本稿では調査対象にしなかったが、ロシア語母語話者を対象にした松井(2006)の調査では、日本語の「結果の状態」に対応するロシア語の形式に注目し、ロシア語には、日本語の「結果の状態」に分類されるものでも、完成・完了することを表す完了体を使って説明的にしか表せないもの(例：財布が落ちている)と進行・継続中の動作や習慣化されている動作を表す不完了体(例：椅子に座っている)を用いる区別があり、それらの区別が学習者の習得に影響を与えているとしている。(表4参照)

表4 各言語におけるマーカー

日本語	動作の継続	結果の状態	
ロシア語	不完了体		説明的(完了体)
中国語	在	着	了
韓国語	goitta	əitta	a/Ətta
例	走っている	服を着ている	機械が壊れている

※上記の区別は大まかな区別であり、全ての動詞において同様の区別があてはまるとは限らない。

以上のように、「結果の状態」の用法において、動詞と形態素「テイル」の結びつきが母語の影響によるものであるという指摘はすでになされており、学習者の習得に影響を与える要因として、母語の影響は無視できないものであると思われる。

## 4.2 普遍的カテゴリー

4.1では「結果の状態」を表す用法について、ある言語では動詞によって用いる形態素が異なることを示し、それらの母語の影響が習得に与える可能性について指摘した。しかし、そもそも中国語・韓国語・ロシア語の3言語で日本語の「結果の状態」の用法に似たような区別があるということは「結果の状態」の習得を考えるうえで

非常に興味深い。このことは、逆に日本語の「結果の状態」の用法の特殊性を指摘するものであると思われる。

従来日本語の文法では「結果の状態」の用法を一括りに分類し、その習得に関する研究もその分類の枠内で行われてきた。しかし中国語・韓国語・ロシア語の 3 言語において、同様の区別があるということは、日本語では 1 つの形式・用法で区別されている「結果の状態」という現象も、他の言語では事象の切り取り方が異なるということが考えられる。

では、そのような切り取り方の違いは特定の言語の母語話者にだけ見られる現象なのか、あるいは全ての母語話者に見られる現象なのであろうか。つまり、母語の影響によって切り取り方に違いが見られるのか、それとも母語の違いに関わらず、同様の現象が見られるのだろうか。この点について明らかにする必要があると思われる。もし母語の違いに関わらず、以上のような動詞と形態素との結びつきの違いが見られるのであれば、同じ「結果の状態」の用法における動詞と形態素の結びつきの強弱の差は普遍的な認知カテゴリーによる影響も充分考えられる。

もし母語の影響だけでなく、普遍的な認知カテゴリーが動詞と形態素との結びつきに影響を与えているのだとすれば、具体的にどのような普遍的な認知カテゴリーが影響を与えているのだろうか。従来の先行研究では「動作の継続」の用法と「結果の状態」の用法について形態素「テイル」と結びつく動詞の内在アスペクト(活動動詞と「テイル」、到達／達成動詞と「テイル」)が影響を与えるとされていた。具体的には、その動詞の内在アスペクトが限界性を持つか否かによって、形態素との結びつきが異なるとされていた(Shirai and Andersen(1995))。しかし、「テイル」と結びついて「結果の状態」を表す到達／達成動詞はどちらも限界性を持つため、従来までの限界性の有無による区別では説明できない。それらの動詞間の区別では、従来の限界性という観点とは異なる要因が影響を与えていると考えられる。

では、その従来とは異なる観点による普遍的カテゴリーとは、どのようなものであろうか。本稿では、中国語やロシア語での区別を参考基準としてその可能性を指摘したい。前述したように、中国語では、日本語の「結果の状態」に対応するものでも、動詞によって結びつく形態素が異なり、それらは既に起こった変化を表す「了」とその場の状態を表す「着」の 2 つがある。また、ロシア語では、同様に完了体と不完了体の区別がある。それら両言語での区別は不完了体＝「着」、完了体＝「了」でほぼ一致していると思われる。つまり完了体＝「了」は既に終わった動作の結果、変化を伴う事象で過去形の「夕」で表され、不完了体＝「着」は動作の結果、変化がなく「テイル」をつけてその場の状態・様子を描写するものと考えることができそうである。

今回のフォローアップインタビューでの結果でも、「壊れる」「落ちる」などの完了体を表す動詞に関して、学習者は「過去」「完了」「結果」, 「着る」などの不完了体を表す動詞では「現在」と説明していた。このことから、学習者の認知はやはりロシア語や中国語での区別に従って認知している可能性があると思われる。

しかし、今回のフォローアップインタビューの対象者は、母語に「結果の状態」における形式の違いを持つ学習者なので、母語での形式の違いがそのまま認知に影響を与えたと考えるならば、その認知の方法が母語に関わらず普遍的かどうかは証明しにくいと思われる。この点に関しては、母語にそのような形式の違いがない学習者を対象にした調査を行い、検証する必要があると思われる。もし母語の違いに関わらず「結果の状態」において同様の傾向が見られるのであれば、普遍的な認知カテゴリーの存在が明らかにできるとと思われる。

#### 4.3 インプットの影響

4.1では、母語の影響による説明、4.2では普遍的な認知カテゴリーによる説明を行ったが、3番目の説明として、インプットによる要因も考えられる。菅谷(2005)では、学習者がかたまりとして「テイル」の用法を覚えている現象を指摘し、「結果の状態」の用法の中でもある特定の語彙については、「テイル」との結びつきが強く、習得されやすいとしている。

また、英語のL1習得におけるアスペクト仮説の検証を試みたShirai & Andersen(1995)の研究では、調査対象者の幼児の発話中に動詞と形態素の偏りが見られたとしながら、同様にcaretakerである母親の発話の中にも、動詞と形態素の偏りが見られたということから、母語話者のインプットに偏りがあって、それが学習者のプロトタイプ形成に影響を与え、習得を促進するのではないかと指摘している。もし、Shirai & Andersen(1995)の指摘する現象が今回の調査にも当てはまるのであれば、母語話者の発話中の「結果の状態」の「テイル」が同じ到達/達成動詞の中でもある特定の動詞についてだけ形態素との結びつきに偏りが見られて、学習者の「結果の状態」の習得に影響を与えている可能性がある。しかし、この点についても今後母語話者の発話データにおける「結果の状態」での動詞と形態素の結びつきを調査するなどして、明らかにする必要があると思われる。

## 5 今後の課題

本調査は 4 つの動詞における動詞と形態素の結びつきを調査した結果、同じ「結果の状態」を表す動詞の中でも動詞によって形態素との結びつきに強弱があることがわかった。そしてそれらの結びつきに影響を与える要因として、母語の影響、普遍的な認知カテゴリーの存在、インプットの影響の可能性を指摘した。

しかし、今回対象とした動詞は 4 つであり、一般化するにはデータの数不十分であったため、質・量ともに充実したデータによる調査を行う必要があると思われる。具体的にはより多くの動詞を調査対象にして、理論の一般化をする必要がある。

また、今回の調査で対象にした学習者の母語が「結果の状態」において同様の区別を持っていたため、母語の影響と普遍的なカテゴリーの存在を検証することができなかった。今後は「結果の状態」を表す文脈において結びつく動詞と形態素に区別のない母語の日本語学習者を対象にし、文法性判断テストやフォローアップインタビューを行う必要があると思われる。

最後に、インプットの影響も考慮する必要がある。菅谷(2005)の指摘するように、学習者がある特定の形式をかたまりとして覚えているという現象や、Shirai&Andersen(1995)が指摘するように、母語話者のインプットが学習者のプロトタイプ形成に与える影響についても調査を行う必要がある。具体的には母語話者の発話中に見られる「結果の状態」の用法での動詞と形態素に学習者と同様のかたよりが見られるかどうかを調査し、母語話者のインプットが学習者の習得に影響を与えているかどうかについても検証したい。

今後の方向性として、母語の影響、インプットの影響、動詞の内在アスペクトの影響など、これら複数の要因がどのように関連しあって習得に影響を与えるのか、そのメカニズムを明らかにしていくことが重要であると思われる。

参考資料①文法性判断テストの例

問題：次の選択肢の中から適当と思われるものを全て選び、( )の中に次の記号を書き入れてください。In the following choices, choose all which you think are grammatically correct. Write ◎, ○, or △ in the ( ). You can choose more than one.

- |   |
|---|
| ◎ = 「自然だ」と思うもの (natural, acceptable)  |
| ○ = 別に不自然ではないが、「私なら○をつけた方の言い方をするな」と思うもの (Not unnatural, but I prefer the choice of ◎)               |
| △ = 「少し不自然かな」と思われるが、「あり得ない言い方ではないな」と思うもの (Sounds a little strange, but not completely unacceptable) |

- ①この部屋暑いでしょう？ クーラー (room cooler) が \_\_\_\_\_ んです。  
( ) 壊れる ( ) 壊れた ( ) 壊れている ( ) 壊れていた
- ②A：今日はお正月 (New Year's Day) なので、たくさんの人が着物を \_\_\_\_\_。  
( ) 着ます ( ) 着ました ( ) 着ています ( ) 着ていました
- ③A：このカレー (curry) すごく辛いですね。  
B：ええ、スパイス (spice) がたくさん \_\_\_\_\_ んです。  
( ) 入る ( ) 入った ( ) 入っている ( ) 入っていた
- ④あそこに自転車の鍵が \_\_\_\_\_ よ。  
( ) 落ちます ( ) 落ちました ( ) 落ちています ( ) 落ちていました

## 参考資料②フォローアップインタビュー

※それぞれの発話で調査に関係があると思われる部分だけを抜粋した。聞き取りにくい部分は××で示した。

中A：中国人学習者A 中B：中国人学習者B 韓A：韓国人学習者A 韓B：韓国人学習者B

「壊れる」

(中A) 「壊れた」じょう・状態のけい・継続？あーんーこわれて・んーあーその状態はあの、いま・まだ

(中B) 「壊れた」壊れたんです。んーんその結果表すときなんか壊れた

(韓A) 「壊れた」んー壊れた。この前に壊れてるから。

(韓B) 「壊れた」「壊れている」あまり理由とかない。正しいと思ったんです。

「着る」

(中A) 「着ています」あーあの、きてい・あー今、着ている。

(中B) 「着ている」なんか、これは感覚だけです。

(韓A) 「着ます」「着ています」普通は日本の文化ですから。

(韓B) 「着ています」って××そうなるんじゃないかな。

「入る」

(中A) 「入った」過去・過去

(中B) 「入っていた」これが適切だと思いますから。

(韓A) 「入った」は過去に作られたものですから。

(韓B) 「入った」スパイスを入れたのはさっきのことだから

「落ちる」

(中A) 「落ちました」んーあーこの鍵はもう落ちました。

(中B) 「落ちました」あー結果を表しました。

(韓A) 「落ちた」「落ちている」これ、同じです

(韓B) 「落ちている」「落ちていた」えっとそれが今落ちているなら、落ちていますで、さっき落ちてたけど、今落ちてない、だったら落ちていました。

## 【参考文献】

- 影山太郎(1996)『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版
- 韓先熙(2005)『第2言語における日本語の習得研究—韓国人学習者を中心に—』J&C
- 許夏珮(1997)「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号, 37-48頁
- 許夏珮(2000)「自然発話における日本語学習者による『テイル』の習得研究—OPIデータの結果から—」『日本語教育』104号, 20-29頁
- 黒野敦子(1995)「初級日本語学習者における「-テイル」の習得について」『日本語教育』87号, 153-164頁
- 小山悟(1998)「日本語学習者のテンス・アスペクトの習得」第9回第二言語習得研究会全国大会発表原稿, 名古屋大学
- 小山悟(2003)「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に—」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育：日本語を対象として』くろしお出版, 415-436頁
- 徐莉(2005)「アスペクト表現の『～ている』に関する習得研究—中・上級の中国人日本語学習者の場合」『比較社会文化研究』第17号, 85~91頁
- 菅谷奈津恵(2003)「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究：『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『日本語教育』119号, 65-74頁
- 菅谷奈津恵(2004)「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討—」『日本語教育』123号, 56-65頁
- 菅谷奈津恵(2005)「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育』2005年11月特集号, 39-67頁
- 松井一美(2006)「ロシア語母語話者のテイルの習得におけるロシア語の影響について」日本語教育学会春季大会発表原稿, 東京外国語大学5月21日
- Rosch, Eleanor.H.(1973)“On the internal structure of perceptual and semantic categories” Timothy E. Moore, ed., *Cognitive development and the acquisition of language*, New York: Academic Press, pp. 111-144
- Shirai, Y. and Andersen, R.W.(1995)“The Acquisition of Tense/Aspect Morphology: A Prototype Account”, *Language* 71, pp. 743-762
- Shirai, Y. and Kurono, A.(1998)“The acquisition of tense-aspect morphology in Japanese as a second language” *Language Learning*, 48, pp. 245-279.
- Vendler, Z.(1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell

## 要 旨

This paper investigates the acquisition of *teiru* in L2 Japanese. The focus of the previous work was to reveal the order of the acquisition in the grammatical meanings of *teiru* and to test the universal status of the Aspect Hypothesis (Shirai and Andersen 1995) in L2 Japanese.

In the most of the earlier studies, it has been revealed that for learners, progressive meaning of *teiru* is easier than resultative meaning, and learners associate telic verbs with past tense marker *ta* and Activity verbs with durative/imperfective marker *teiru*. However, those studies mainly focus on the acquisition of tense-aspect in different grammatical meanings and in different verb classifications.

This research takes a somewhat different perspective and focuses on how learners acquire the resultative meaning of *teiru* and how they associate *teiru* with telic verbs. The major finding is that learners tend to associate *teiru* with a specific verb, wear and *ta* with verbs , break, fall. The possibility of further hierarchy of the acquisition in the same grammatical meaning is suggested.

This will be accounted for by 3 factors, L1 of the learners, universal cognitive category, and input from native speakers, and further research is proposed that may clarify multiple factors of the acquisition of tense-aspect in L2 Japanese.

キーワード：テイル, 結果の状態, 動詞の形態素の結びつき, 母語の影響,  
 普遍的な認知カテゴリー, インプットの影響

투 고 : 2006. 11. 30  
 1차 심사 : 2006. 12. 9  
 2차 심사 : 2006. 12. 30

住 所 : 福岡県宗像市日の里 1 丁目8-8  
 電 話 : 0940-36-7630  
 e-mail : [eriko0523jp@yahoo.co.jp](mailto:eriko0523jp@yahoo.co.jp)